

放送日： 平成 20 年 2 月 10 日

タイトル： 前立腺癌

担当者： 医師 長船 崇

本日は、最近増加傾向にある前立腺がんとはどのような病気か、前立腺がんの特徴、検査と診断、治療などを最近の動向も含めお話しさせていただきたいと思います。

前立腺がんは、高齢の男性に多い病気です。

アメリカ合衆国では、男性のがんの中で肺がんに次いで 2 位と最も多いがんの一つです。わが国においてははまだそれほど多くはありませんが、泌尿器科で扱う男性のがんの中では一番多いのが前立腺がんです。また、将来的には最も増加するがんの一つと考えられており、2020 年には日本でも肺がんに次いで第 2 位になると予測されています。日本において、前立腺がんがこれほどまで増加しているのには、社会の高齢化、食生活の欧米化、診断法の進歩、といった 3 つの要因が関係していると考えられます。

初期のうちは症状がほとんどないことが多いので、症状があらわれてから受診するのではなく、できれば検診で早期発見していただきたいと思います。病気は早期発見が大切ですが、特に前立腺がんにおいては、早期発見、早期治療がとても大切です。

前立腺は、男性の膀胱の真下に尿道を取り囲むように位置し、後ろの方は直腸に接しています。このため、検査などで肛門から指を入れると、直腸ごしに前立腺に触れることができます。

前立腺の病気としては、がんの他に「前立腺肥大症」がよく知られています。前立腺肥大症は、前立腺の中心部に良性の腫瘍が発生し、尿道が圧迫され狭くなることで起きるもので、40 歳以上の男性に多く起こります。尿が出にくくなったり、トイレの回数が多くなる、尿をしたあとすっきりしない、などの自覚症状があらわれます。

一方、悪性腫瘍である前立腺がんは、主に辺縁部にできます。病気が進行すると、前立腺肥大症と同じような排尿障害がみられますが、初期のうちは、ほとんど自覚症状がありません。

前立腺がんは悪性腫瘍、前立腺肥大症は良性腫瘍です。従って、前立腺肥大症は転移しませんが、前立腺がんは、放置した場合転移をおこし、最終的に死に至る病気です。

前立腺がんと前立腺肥大症とは異なる病気であり、前立腺肥大症が前立腺がんに行進することは通常ありません。しかし、これらは合併して起こることも多いので、気になる症状があらわれたら、早めに受診されることをお勧めします。

このように、前立腺がんは、初期のうちは症状に乏しく、自覚症状が出たときにはがんが進行している事が多いので、男性は 50 歳を過ぎたら、定期的に前立腺がんの検査を行う事が大切です。

次は、前立腺がんの検査・診断について、お話しします。

まず、前立腺がんの疑いがある人をふるいわけするための検査として腫瘍マーカーである PSA 値を調べる血液検査、触診で前立腺の状態をみる直腸診、超音波検査があります。

このうち、1 つでも異常が認められる場合は、前立腺の組織を採取し、それを顕微鏡で観察してがん細胞の有無を確認する前立腺生検が行われます。この検査でがん細胞が確認されれば、前立腺がんの診断が確定されます。

前立腺がん診断が確定したら、MRI や CT、骨シンチグラフィなどの画像検査を行い、がんの広がりや転移の有無を確認します。

ここからは、前立腺がんの治療についてお話しします。

前立腺がんの治療には、手術療法、放射線療法、内分泌療法（ホルモン療法）など、さまざまな治療法があります。これらの治療を単独、あるいは、組み合わせて行います。また、治療で経過観察を行うこともあります。

治療法を決めるのに重要な要素としては、患者さんの年齢、全身状態、合併症の有無、がんの進行度やタ

イブなどがありますので、これらをよく見極め、患者さんやご家族ともよく相談しながら、治療方針を立てていきます。

以上、前立腺がんについてお話ししてきましたが、もういちど強調しておきたいのは、前立腺がんは、早期に発見されれば完治が期待できる病気です。男性は、50歳を過ぎたら、年に1度は前立腺がん検診を受けましょう！